追手門学院大学

地域文化創造機構ニューズレター

Institute for Regional Culture Development Newsletter　Vol.10　2015. 6. 25

活動報告

トピックス 1

「追大ミツバチプロジェクト」大阪南港エコフェスタ出展

地域文化創造機構 研究員
地域創造学部 准教授
今堀　洋子

「追大ミツバチプロジェクト」は、昨年に引き続きプロジェクト型授業として継続しています。残念ながら今年は、ニホンミツバチが各地で激減しているようで、このプロジェクトでもミツバチ達を確保できないでいます。そこで、急遽セイヨウミツバチの養蜂に切り替えることにしました。まずはセイヨウミツバチで経験を積み、ニホンミツバチの養蜂に備えます。

さてそんな中、去る6月13日（土）に、大阪府と本学院の環境教育促進等に関する協定の具体化の一つとして、大阪府と大阪市による共同開催の南港エコフェスタに、「追大ミツバチプロジェクト」を出展いたしました。当日は8名の学生が手伝ってくれました。今回のフェスタに向けて、昨年のプロジェクトの活動内容と、ミツバチの生態をＱ＆Ａにしたものを、それぞれ1枚の模造紙にまとめました。それを当日は展示しました。また、昨年から継続して行っているミツバチをテーマにした自前の紙芝居も3作品持っていきました。更に、ハチミツの試食コーナーも設けました。プロジェクト顧問の坂本京都学園大学教授からいただいたニホンミツバチのハチミツ（京都学園産）と、りんごのハチミツ（セイヨウミツバチ）二つを持っていき、味の比較をしていただきました。

会場は、南港ATCのITM棟11Ｆ西側の、おおさかATCグリーンプラザ内多目的スペースで、他には、日本野鳥の会や、大阪産業大学の菜の花プロジェクトから出展していました。参加者は、幼稚園や小学生のお子さんのいる家族連れ、あるいは中学生、高校生だけでの参加も見受けられました。まずは、ニホンミツバチとセイヨウミツバチのハチミツを実際に食べ比べてもらい、そこから、ハチミツのこと、ミツバチのこと、今ミツバチ達が危機に面している事実など、ブースを訪れた方々とお話させていただきました。また、子供たちには紙芝居の上演も致しました。

プロジェクトメンバーによる紙芝居上演

参加した学生達の感想には、「色々な方々とミツバチのことについて話す機会を得られて自らの学びになった」であるとか、「紙芝居を演じて楽しかった」とか、「試食がいかに人を引き付けるかを知った」などがありました。現場に出ていくこと、自分達のプロジェクトを紹介することは、楽しいことであり、学びも多いのだと改めて感じました。このような機会を与えてくださった河合機構長はじめ、皆さまにお礼申し上げます。

トピックス 2

爆笑に拍手の渦･･･
宮本輝・道上洋三対談

地域文化創造機構教授
兼副機構長
豊島　眞介

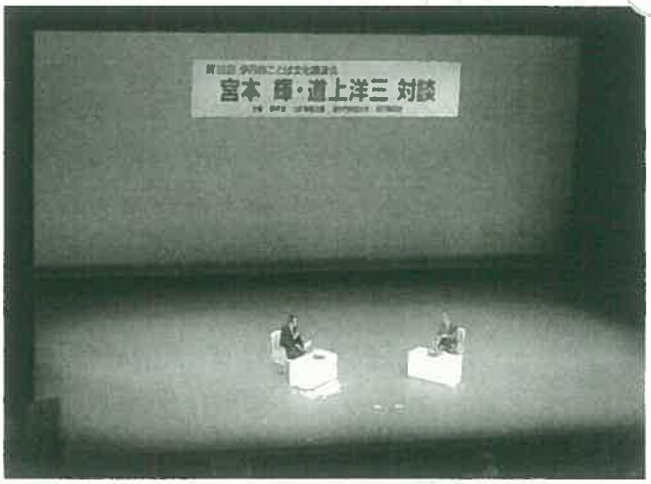
伊丹市制75周年と追手門学院大学宮本輝ミュージアム開設10周年を記念した第10回伊丹市ことば文化講演会「宮本輝・道上洋三対談 人生と文学～いのちの姿」が6月21日(日)午後1時半から兵庫県伊丹市のいたみホールで開かれました。人気作家と人気パーソナリティの対談とあって、1200人定員の大ホールは満員。手練（てだれ）のパーソナリティが繰り出すきわどい質問に観客は爆笑したり、拍手喝さい。宮本文学の舞台裏が分かりやすく解き明かされた一日となりました。

講演会は第一部が伊丹生まれの兄弟デュオ「ちめいど」のミニライブ。優しいハーモニーが響き渡りました。

第二部が宮本輝・道上洋三対談。宮本さんは、追手門学院大学1期生で1970年卒業。1978年に「螢川」で芥川賞を受賞した後、道上さんが朝日放送ラジオの「おはようパーソナリティ道上洋三です」に宮本さんを呼んだという旧知の間柄。テンポのいい道上さんの突っ込みに宮本さんが笑みを浮かべながら答えました。

道上さんがまず取り上げたのが最新刊の「田園発　港行き自転車」。「読んだ方は手を挙げて」という道上さんの質問に、会場からの挙手はパラパラと。「後でロビーで買ってください」と注文をつけながら突っ込んだのが「田園発」が誕生したきっかけについてでした。

宮本さんは「芥川賞を取った『螢川』は富山が舞台ですが、富山を取り上げた小説は少ない。私は小学生のころに１年間富山で暮らしています。受賞直後に（富山市に本社がある）北日本新聞の若手記者から依頼があり、『富山と私』という題でエッセーを書きました。それからお付き合いが続いていたのですが、数年前にこの方が北日本新聞の社長になった。嬉しくて『いいお祝いをするよ』といったら、お願い事があると伊丹の自宅にやってきて小説を頂けないか、というのです。その時は粘らず帰ったのですが、後日、若手の文化部記者が、社長がお願いした件はいかがでしょう、というのですね。結局、翌年の1月1日から週1回連載することになった。引き受けたのは8月末で開始まで少ししかない。で、事務所のものと車で富山に行きました。ものすごく天気のいい日でのどが渇いて仕方がない。新潟側から不知火トンネルを抜けると富山県。大田園地帯が広がっていました。



道上洋三さんの突っ込みに答える宮本輝さん

『湧水の町　入善町』とあって、湧水を飲めるところでのどを潤しました。そこから黒部川沿いに走り回ったのですが、田んぼの稲穂は色づいているし、黒部川の西側が黒部市、東側が入善町、後ろが立山連峰、前が富山湾です。この中を山際の愛本橋から漁港まで自転車で走ったら気持ちいいだろうな、と思ったら人間の姿が浮かんできました。それで帰宅してから担当記者にタイトルは『田園発　港行き自転車』と話したのです」。

道上さんは「登場人物も決まってないのにええんですか」「拡大地図でもないと位置関係がよう分かりませんね」と突っ込みを繰り返しながら、「田園発」の主要登場人物が誕生したきっかけを質問。「その田園地帯を自転車で走ったのですか」という

問いに宮本さんが「いや走っていません」と答えて爆笑の渦がわきました。

次いで、宮本さんが作家になったきっかけ。追手門学院大学を卒業後、宮本さんは25歳で結婚し、間もなくパニック障害に。勤め先の広告代理店に通うにも電車に乗れない。芥川賞作家の短編小説を書店で立ち読みして「これなら書ける」と思い、すぐ奥さんに電話して「会社を辞める」と宣言。その3年後の1977年に「泥の河」で太宰治賞を受賞。翌年、芥川賞を受賞したあと肺結核が待ち構えていました。

宮本さんは「血を吐いて、（レントゲン）写真みたら、肺の下のほうが真っ白。これはアウトやと。特効薬を飲んでもすぐ効くわけではないし、治るのに3年かかりました。その間もパニック障害は治らなかったし、55歳まで30年間悩まされました。治るまでは取材に行くにも家内や事務所のものについてきてもらいました。今でも飛行機は苦手です」と振り返りました。

闘病生活で鍛えられたのが宮本さんの作家精神でした。「小説には作家の根底にある人生観、価値観が反映されます。哲学というか作家精神です。そのような不動のものがある作家とない作家がいる。確固たるものがある人は世界で数えてもごくわずか。ほとんどの人は技術でカバーしている。人間は何のために生まれてきたのか。生と死をさまようと、そのようなことを考えるようになります」と話しました。

「小説には作家の根底にある人生観が反映される」と語る宮本さん

「父は難しい人でした」と振り返る宮本さん

「インタビューアーは嫌なことも聞くのが仕事」と道上さん。「宮本文学の原点はお父さんではありませんか」と突っ込みました。宮本さんは「（父をモデルにした大河小説『流転の海』の）主人公より１歳年上になってやっと父の気持が分かってきました。父は気分のいい時、私をお茶屋や、競馬場に連れていきました。その帰りに飲みに行って隣り合わせた人に『お前ら教養がない』などと言ってケンカするんです。難しい人でしたね。20年以上前に亡くなった母には今でも会いたい。あれもこれも謝らなあかん、あのとき2000円返してなかったとかね」

最後は宮本文学の今後。道上さんは「ノーベル文学賞の候補に宮本輝の名前が挙がらないのは悔しい。もっと翻訳してもらったら」と水を向けました。宮本さんは「『錦繡』を翻訳してくれたアメリカ人が『宮本さんの日本語はシンプルで絶妙な美しさを持っている。ただ、英語にはとても翻訳しにくい』というのです。フランス語に翻訳した方も同じ意見でした。せっかく翻訳しても、1000部、2000部しか売れなのではビジネスになりませんね」と苦笑い。道上さんがいつまで小説を書くのかと投げかけると「85歳まで書くと長篇小説を100冊書いたことになる。長篇小説を100冊書いた作家は世界にいない」と宮本さんが回答して、大きな拍手がわきました。

活動報告

トピックス 3　将軍山会館にハープの音色、気品高く

地域文化創造機構教授
兼副機構長　豊島　眞介

6月16日（火）の昼下がり、将軍山会館に透明なハープの音色が気品高く響き渡りました。クラシックのすそ野を広げる狙いで続けているアドバンスト・リサイタル（追手門学院大学創立50周年事業）は通常、大阪城スクエアで開催されていますが、「学生たちにもっとクラシックに親しんでもらいたい」との狙いから将軍山会館で開催したものです。これまでは声楽や、ビオラなどが登場して音響の良さは実証済み。満を持して16日は心をいやす音色といわれるハープがお目見えしました。

演奏したのはソロ、オーケストラでの演奏活動に実績があり、コラボにも力を入れているハーピスト、石井理子（みちこ）さん。演奏スタートは午後0時50分。昼食時間とかち合う時間帯ながら一般客に教職員、学生が計83人入場して耳を傾けました。

この日のプログラムは石井さんのソロでスタート。ヘンデル作曲の「パッサカリア」、ドニゼッティ作曲のオペラ「ランメルモールのルチア」よりカデンツ、ロドリーゴ作曲「アランフェス協奏曲」第二楽章、ワトキンス作曲の「ファイヤーダンス」と流れるように4曲演奏。休憩時間には司会の作曲家で本学客員教授の門田展也さんがハープの弦は47本あり、赤色の弦が「ド」、黒色の弦が「ファ」になり、足元のペダルで半音の操作をすることなどを解説しました。

ハープとフルート 協演の様子

5曲目はイギリスやアイルランドの民謡演奏にも使われる「ケルティック・ハープ」でスコットランド民謡が奏でられ、高く澄みとおった音色に、観客から大きな拍手がわきました。後半は、ハープと相性が良いといわれるフルートとの協演。若手の芦田正子さんが石井さんと、門田さん作曲の「フルートとハープのためのソナタ」など2曲を演奏。軟らかく深い音が吹き抜けの将軍山会館に響き渡りました。アンコールの「浜辺の歌」も感動もので、拍手が鳴りやみませんでした。

アンケートには「ハープの演奏は初めてだったので、優美さにうっとり。フルートの演奏もすばらしかった」（60代男性）、「ファイヤーダンスを聴いたとき、ハープにそんな音がだせるのかと非常に驚きました。ケルティック・ハープの音は単調さがまた魅力でした」（20代女性）、などの感想が寄せられました。

催し物ご案内（予定）

イベント名	開催日時	入場料・定員	お申し込み・会場等
●追手門学院大学創立50周年記念事業● ファミリークラシックコンサート vol.16 **アンドリュー・メイヤー** **オペラの楽しみ～第2弾～** プログラム ☆ヴェルディ:ドンカルロより「友情の二重唱」 ☆門田展弥:オペラOTOHIME（フランス語版） ほか	7月26日（日） 15:00～ （開場14:30）	入場料：高校生以上500円 （小・中学生無料） 定　員：100名 （申し込み先着順・ 定員になり次第締め切り）	会場：追手門学院 大阪城スクエア お申し込み方法： HP：http://www.otemon-osakajo.jp/ お問い合わせ：追手門学院 大阪城スクエア TEL　06-6942-2788

地域文化創造機構 ニューズレター

発行／追手門学院大学 地域文化創造機構

お問い合わせ

追手門学院大学　地域文化創造機構　「連携考房　童子」
〒567-0816　大阪府茨木市永代町4-202（阪急茨木市駅前「Socio-2」2階）
TEL:072-621-6015　FAX:072-622-1360　E-mail:douji@otemon.ac.jp